

高校生をヒマラヤへ

山中保一

高校生をヒマラヤへつれていこうと思出したのは、3年前のことである。それまで高校登山を指導したことのなかった私は、山岳部をつくるにあたって、クラブの目標の1つに海外遠征をおいた。高校教育の中でも国際化が叫ばれる今日、登山も海外の山を登ることがあっても特にどうということはないであろう。又、競技登山で終わらずに、次の目標として、1つの登山の形として海外登山を経験させるのも悪くはないのではと思った次第である。

それではどこへ行くか、どうせ行くならアラスカやヨーロッパの先進国よりも、同じアジアの中で今の日本が見失ったものを多く持っている国が、教育的にも高校生には良いのではないかと、そして、ハイキングの延長ではなく、ある程度、より高くへの限界に挑めるところ、又、時期が夏休み中と限定されるので、アプローチが短く、雨季の影響の少ないところということで、インドヒマラヤになりました。高度は、今までの私の経験と過去のデータ、本校の部員の力量からして、当初、ルートさえ難度を求めなければ6000m峰でも十分登れると思っていた。しかし、学校側の注文で5000m峰に妥協した。これは、今までの実績がない点と安全度を考えると仕方ないことであったが、その結果、登山として多少興味を欠くものになってしまったのは否めない。

先に学校側と書いたが、幸い3年前に赴任した学校は私学であり、県教委に対してのめんどろな手続や許可の問題はないが、理事会及び校内理解には多くの時間と労力を要した。このために3年かかったといっても良いぐらいである。特に日本山岳会東海支部の尾上部長や名城大学の沖先生には第三者的立場の専門家ということで、高校生のヒマラヤ登山についての懇談会をひらき好意的な意見を述べてもらった。最終的には、理事長を山に招いて普段の山のトレーニングをみてもらい、ゴーの決断をしてもらった。

問題は資金であったが、高校生に対してどこまでの個人負担をかけるかが問題だった。所詮遊びに行くんだからタダにしてはいけないし、自分の力でかせいだ額で無理のないところということで、1人15万円とした。なにぶん初めてのことであり、予想していたより多くの資金を関係者に集めていただき助かった。

トレーニングについては、3年計画で、はじめから高所登山を意識して心肺の強化を中心としたトレーニングをおこなった。平地でのインターバルトレーニングとクロスカンントリー的なランニング登山が中心であった。その結果、出発前の名古屋大学低圧実験室で7000mまで気圧を下げてもらったデータから森先生に平均値以上という言葉をいただいた。又、昨年夏は、ヒマラヤの長期合宿を想定して、北海道で20日間の合宿を模擬的に行い、精神面と体調コントロールを体験させた。そし

て、年間延べ120日以上 of 山行を毎週末と春・夏・秋・冬合宿と合わせて行うことにより、山のいろんな変化に対する経験とチームワークの強化に努めた。

現地では、当初、心配していたカルチャーショックよりも、高度障害に悩まされた。出発前までにあれだけのトレーニングを積み、十分高所に適応できる準備をしてきたつもりだった3500mぐらいから、次々と高度障害にかかってしまった。その原因をいろいろ分析してみたが、一番の原因はメンタルなものからでたという結論に達した。愛知学院大学教授の湯浅先生に伺ったところ、精神的ストレスが高度障害をおこすという話をきいて、なるほどと思ひあたる点が多々あった。特に、経験の浅い高校生では、国内でできるだけ極限の状況でトレーニングを重ねたといっても、冬の穂高のビバーク経験まではさせられず、「ヒマラヤ」「未知の高所」「大なる自然」に対する驚きと不安から、精神的な自分の壁を破れず、守りの態勢に入りすぎ、順化できなかったのかもしれない。これが1対1のガイド登山か、もしくは経験者のパーティに1、2名混るといのであれば、その結果もちがったものとなったであろう。現に韓国では高校生の登山者が、7000m峰に立ったという記録がある。ただ、今回のような高校生の7人パーティという集団登山では、互いが影響し合っ余計に悪い作用を作り出してしまった。また、そんな状況を見通して的確な順応をさせれなかった指導者としての私の責任も感じる。しかし、そのような最悪のコンディションの中でも7人中6名が頂に立てたということは、普段のトレーニングのたまものであったと思われる。天候とルートに恵まれたということもその要因として大きいと考える。

ルートについては何ら困難さはなく、出発前の計画の時、ランドサットの写真で雪が5000mからでてくると想像していたが、実際には、少ししかでてこず、全くピッケルとアイゼンも使わずに済んだ。現地の人のお話によると最近雪は少なくなっているとのことだったが、全く勝手なもので、ないとなると多少がっかりした。となりの実年隊のヤン峰の写真をあとでみせてもらったが、6200mでも少なく、インドヒマラヤ全体が少なくなってきたのか、いたしかたないところであった。一応、日本からは、何の記録もレポートもなかったので、フィックスロープまで用意していったが、これも使わずにそのまま日本にもって帰ってきた。

輸送は、大阪—デリーの直行便で、すべての隊荷を持ち込んだ。現地でもそのままスリナガールまで飛行機で入り、そこからレーまでバスで入った。現地では、現地エージェントの手を借り、できるだけ余分な神経を使わないようにした。現地エージェントにはBCまで任せた。

装備は、短期速攻の方針でBCから上は、1日のアタックキャンプだけとした。一応、日本の冬山装備とフィックス・ロープを持参したがフィックス・ロープは使用しなかった。

食糧は、日本からの持ち出しの別送をさけるため、BCまでは現地食を中心にしたが、特に、高校生には問題がなかった。現地に対する順応は、やはり若ければ若いほど抵抗なく行えるように思える。高度障害より現地適応力を現代っ子ということで心配したが、無用であった。現地の人やレーにきて

いたドイツ人・ベルギー人及びリエゾンオフィサー等とも親しくなって、歌ったり踊ったりしていたのにはこちらが驚いた。海外遠征は、山に登るだけでなく、現地での異文化に接し、いろんな人とも交える喜びが味わえるのもいい経験である。

最後に、これからは、高校生も先生も山の世界の広がり求めて海外へ出かけるのもよい。何も無理して登らなくても、合宿として、トレッキングをしてもいいではないか。高校生の時は、山の基礎をみっちりやるべきだという考え方も1つだが、それにこだわることはないと思う。県内から県外へ、そして国外へ、その障害は大きいですが、山を志す生徒たちを伸び伸びと育てるためにも、1つ1つ指導者が努力して、その障害をとりはらって自由化していきたいものである。

今回の我々の活動は、詳しく報告書として、今、編集集中であるので、御希望の方は後日、下記まで連絡をいただきたい。

〒513 三重県鈴鹿市庄野町1267

鈴鹿高等学校内

山岳・スキー部顧問

山中保一

(TEL 0593-74-0349)